

1. 出題の意図

課題文は、植田和弘京都大学名誉教授が2013年に著した、『緑のエネルギー原論』（岩波書店）の一部である。エネルギー政策と地域の持続可能性、とりわけ再生可能エネルギー利用の重要性について欧州の例などを挙げながら論じており、環境経済学の立場から多くの示唆に富んだ主張がなされている。

課題文には専門的な英語略語が使われている部分もあるが、難解な用語ではなく、受験生にも十分理解できる内容となっている。廃棄物が制約される時代である点、2011年の福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染の除染の問題、さらには再生可能エネルギー利用の優位性が関連付けられて論じられている。

設問にあたっては、こうした著者の問題意識を、前後の文脈から読み取る読解力やその要約力を問う（問1、問2）とともに、受験生の意見を明確にした上で論理展開力を問う（問3）ような出題となっている。

2. 評価のポイント

問1

問1は読解問題である。現在おこなわれている「除染活動とは本質的には放射能汚染をなくしているのではなく別のところに移しているのであるから、移染活動とよぶべきものである」との表現に対して、なぜ「除染」ではなく「移染」なのであるか、を課題文における著者の主張を理解した上で、その違いと理由を説明することが求められる。

よって評価のポイントは、1)「除染」とは何か、2)「移染」とは何か、を述べた上で3)「移染」の限定的効果について、の3点が説明できているかということになる。

問2

問2は読解問題である。著者が挙げているデンマークにおける再生可能エネルギーへの取り組みの例が「地域政策」にもなっていることを、課題文における記述を正確に把握することが求められる。

よって評価のポイントは、1)例における「取り組み」の説明として、「農家が集まって出資したこと」「風力発電所をつくったこと」「再生可能エネルギーを増やすこと」が説明され、2)「地域政策」の説明として、「非農業所得・地域の所得をあげる」「雇用を増やす」「地域の持続可能性を高める」が述べられ要約されているかということになる。

問3

問3は論述問題であり、原子力、化石燃料、再生可能エネルギーという3種類のエネルギーによるエネルギーミックスに関する著者の主張について、論理的な意見を述べることを求められる。

よって評価のポイントは、1) 著者の主張に対して賛成か反対かを明示する、2) その意見について説得的・具体的な理由を複数提示する、3) 3つのエネルギーについての考察をする、さらに4) 本文中の論点だけではなく受験生の知識や経験にも触れている、ことがあげられる。

3. 採点講評

問1

本文における著者の主張を理解できれば比較的容易に答えられる問題であるが、課題文の抜き書きに頼ることで2) もしくは3) が答えられていても1) については述べられていない答案が多く見られ、その場合は減点とした。

問2

本文におけるキーワードを正しくおさえることで答えられる問題であるが、本文中の用語を不正確、曖昧に使ったことから部分点にとどまったものが見られた。また「出資する」という意味を正確に理解していないと思われる答案も見られた。

問3

予想通り、著者に賛成する意見が多かった。反対意見でも論理的であれば高得点を付けた。賛成なのか反対なのかわからない答案も散見された。問いの趣旨として3) のそれぞれについてある程度記述をしてもらいたかった。再生可能エネルギーのメリットだけでなく、原子力・火力のデメリットも記述することによって、説得力が高まるがそうでない(1つに特化した) 答案も少なくなかった。4) については、気候変動枠組条約の状況など本文中で触れられていないもの、地熱発電や原発といった地元での立地の事例などがあつた。各エネルギーに対する評価ではなく、「こうすべき」といった提言・べき論に字数を割く答案も散見された。問われていることに的確に対応した解答になっているかといった点で、点数に差が付いた。